

- 鈴木孝夫 1971. 「EnglishからEnglicへ」『英語教育』1月号, pp. 4-5. 大修館書店
- 鈴木孝夫 1975. 『閉ざされた言語・日本語の世界』新潮選書
- 鈴木孝夫 1999. 『日本人はなぜ英語ができないか』岩波新書
- 田中克彦 1993. 『国家語をこえて』ちくま学芸文庫
- 津田幸男 1990. 『英語支配の構造』第三書館
- 津田幸男 (編著) 1993. 『英語支配への異論』第三書館
- 津田幸男 1996. 「目にあまる日本の『英語病』」『朝日新聞 (朝刊)』12月27日 論壇欄
- 津田幸男 2000. 『英語下手のすすめ』KKベストセラーズ
- 津田幸男・関根久雄 (編) 2002. 『グローバル・コミュニケーション論—対立から対話へ』ナカニシヤ出版
- 津田幸男 2003. 『英語支配とは何か—私の国際言語政策論』明石書店
- 津田幸男 2005. 『言語・情報・文化の英語支配』明石書店
- 津田幸男 2006. 『英語支配とことばの平等』慶應義塾大学出版会
- 中村敬 1989. 『英語はどんな言語か』三省堂
- 中村敬 1993. 『外国語教育とイデオロギー』近代文藝社
- 中村敬 1994. 「再び『英語帝国主義』について (上)」『週間金曜日』4月29日号
- 中村敬 1997. 「私が反・英語帝国主義論者になるまで」『現代英語教育』8月号, pp. 20-24. 研究社出版
- 中村敬 2004. 『なぜ「英語」が問題なのか—英語の政治・社会論』三元社
- 文部省 1999a. 『中学校学習指導要領解説 外国語編』東京書籍
- 文部省 1999b. 『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』開隆堂出版
- 文部科学省 2008. 『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂出版
- 文部科学省 2010. 『高等学校学習指導要領解説 外国語編・英語編』開隆堂出版
- 吉村雅仁・島田将夫 1999. 「中学校英語教科書と英語帝国主義」第25回全国英語教育学会 北九州研究大会 発表資料
- 渡辺武達 1983. 『ジャパリシユのすすめ』朝日選書

- Crystal, D. 2003. *English as a Global Language (Second Edition)*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jenkins, J. 2000. *The Phonology of English as an International Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Jenkins, J. 2007. *English as a Lingua Franca: Attitude and Identity*. Oxford: Oxford University Press.
- Kachru, B.B. 1979. "Models of English for the Third World: White man's linguistic burden or language pragmatics?" In Richards, J.C.(ed.), *New Varieties of English: Issues and Approaches*, pp. 8-9. Singapore: SEAMEO Regional Language Center.
- Phillipson, R. 1992. *Linguistic Imperialism*. Oxford: Oxford University Press.
- Smith, L.F. 1983. "English as an International Auxiliary Language." In Smith L.F.(ed.), *Readings in English as an International Language*, pp. 1-5. Oxford: Pergamon Press.
- Smith, L.F. (ed.) 1983. *Readings in English as an International Language*. Oxford: Pergamon Press.
- Trudgill, P. and J. Hannah. 1994. *International English (Third Edition)*. London: Edward Arnold.

—會津きい子生誕百年に寄せて— 観音堂時代の秋艸道人ときい子

北 嶋 藤 郷

はじめに

名著の誉れ高い『會津紀伊子抄』の著者・豊原治郎氏の論文「観音堂時代の會津八一」は、次のように書き起こしている。

およそ、會津八一と養女紀伊子との、この世における出逢いほど、そして、その死別ほど、悲傷に満ちて劇的なものはないであろう。仏教の世界でいう「結縁^{けちえん}」の趣きを、強く感じている。八一にとって、もしも、紀伊子という、この上ない「ともがら」との出逢いがなかったならば、後年令名を高めた学匠としての會津八一の存在そのものはなかったであろうというのが私の年来の主張であり、信念でもある。⁽¹⁾

秋艸道人・會津八一にとって、きい子は文芸への志を同じくする同志であり、その死はとうてい受け入れがたいものであった。どうして同志というかと問われれば、八一の挽歌「山鳩」の序文の冒頭には、「きい子もと高橋氏、二十歳にして予が家に來り養うて子となす。よく酸寒なる書生生活に堪へ、薪水のことに當ること十四年、内助の功多かりしは…」と明記してあるからだ、と答えたい。(書生とは、昨今では死語に近いが、他家に世話になって、家事を手伝いながら勉学する者をいう。)

きい子は、八一の義妹で、弟・戒三の妻キミの妹にあたる。昭和8(1933)年3月末、早稲田大学の教授で、英文学を講じ、東洋美術史研究に邁進する八一の身邊の世話をするため、彼女が下落合の八一の自宅で、世にいう秋艸堂^{しゅうそうどう}の堂守^{どうもり}として入ったのは、弱冠21歳であった。以後10有3年間、八一の学究生活を献身的に支えたのである。きい子は、その青春のすべてを八一への内助の功に捧げつくして、短い生涯を終わった。

きい子は、昭和19(1944)年2月に、八一の養女として入籍されたが、多忙なゆえの疲労と元来の蒲柳な体質のため、疎開先の新潟県北蒲原郡中条町西條(現胎内市)の観音堂というところで、34歳の若さで病没した。

およそ江戸末期に、この観音堂は、当地の豪農・丹呉氏によって、歴代の供養のために、創建されたという。観音堂には、四国33番に型どった、99体の観音像(木像)を安置した丹呉家の持仏堂として、この地方に知ら

れていた。

第一等史料である鉛筆書きの「きい子日記」と、「八一日記」(『會津八一全集』11巻所収)の活字版資料に依りながら、それぞれ日記を紹介するものであり、二人の日記の内容に関するコメントは、このたびはできるだけ控えたい。理由は本稿の眼目とするところが、この観音堂生活における八一の、心境如何ということに焦点が絞られていくからである。最愛の養女を失った悲傷に加えて、折り重なるように大日本帝国の崩壊という、八一を襲った人生最大の逆境の中での観音堂生活の苦勞の中から、彼はまるで山中独居する修行僧のように心を研ぎ出し、いつしか悟りを開いた境地に達したように思えてならないからである。「山鳩」が人々に感動を与え、それが、真に悲傷の曲として不朽であるのは、この苦闘の切実さに発するものであろうが、八一は孤立無援の中での静思の日々から、自分の世界を徐々に変えていった。観音堂を訪ねた門人に、「先輩良寛は62にして山を下ったが、俺は65にして山に入った」と語ったという逸話が残っているが、これは越後の禅僧・良寛を意識しての発言である。「わが郷さきに沙門良寛を出せり。菴を国上の山下に結び、風狂にして世を終ふ」と八一は『南京新唱』自序で述べている。良寛もかくしたであろうような生活を、八一もしたのであった。越後の空の下に生きる、窮乏にたえるひとりの風狂子の明け暮れとあってよかった。貧窮に身を置き、ひたすらこれこそわが身の所業と考え、また新仏への供養と考え、その外に余念はなかったのである。人生の悲哀と寂寞と無情とを、身を以って“悟得した”八一は、不死鳥のように、悲運のどん底から一気に攀じ登り、学芸文人として見事に立ち直ったのである。

きい子「日記」抜抄

7月3日

自分には死ぬことも死なぬ事も何の心の動きにならず むしろとまどひの型なり この苦しさをまだまだ續くならば たった今にも死にたし十貫足らずらしき体重 水腫は下半身が主なり
昨日より一家大さわぎにて 用意してくれられし
観音堂に午後より リヤカに乗りて引きうつる 如何にわびしき心致のするらんと考えおりしも これも死に対すると同じく坦々たり 山井龍三郎氏へ長々の禮状を書きたしと思ふ 胃及び腹依然として堅し 脚氣衝心と云ふものなりや

7月4日

観音堂前庭は殺風景なるも 東側木立の藪はよろしき 夏も涼しき風入

るらし 但し自分には後幾日の命ありや 甚だしく苦しき 手足緑色だちて見ゆ 山本先生(敏晴及夫人) 田路義一氏へ恩返しもせず逝く事
まことに恥しき 今までの生活を省へり見るに生きれば生きただけ 恩人の数が増えた位のものにてほとんど無用の人間たりき
八幡医師令嬢代診として見えられ 大き鯛をもらひ処置にこまり丹呉家にて調理してもらふ 昨夜は引越しのため夕食なし 今日は鯛のさしみ皿に山盛りにて食べきれず 五燭の電気にて食べる食事はわびしき 梅雨にて家中しめっぽく 障子も不完全なれば濕氣自由自在に入り鬱陶しき 道人余程疲勞らしき 申訳ナシ

7月5日

四六時中 人の目に気を配る要もなく物音も何の関係もなきもののみなれば 何となく心安まる 午後早く分家の叔母上来てくださる

7月6日

今日も雨なり 前夜不眠 苦しき事 毎日同じき この位苦しく大儀にてもまだ死なぬものなりや 分家の叔母上きりきりとよく働いて下さる。昼も拂ひて下さりたるとて座れるまでに さらさらとす 蚊ひどかしき

三浦氏より初物胡瓜もらふ おひしき もっと欲しき

7月7日

あまり苦しき故に 夜明けに 叔母上 道人を起こして ほうじ茶を飲ましてもらふ 生き返りたる様なり 既に死を覺悟したるも 弱々乍ら脈あり

人々に迷惑をかけ生きる事心苦しき 年を重ね月日を重ねる毎日に 恩になる事のみ多し 果たして恩返しが 出来るものなりやと ひしひしと想ふ

※7月3日、山井龍三郎は、元栃尾市長。長く高橋戒三と親交がり、折々にきい子を支えた。

7月4日、山本先生(敏晴及夫人)は、秋艸堂時代のきい子の主治医で、令夫人は、きい子のお茶の先生。田路義一は薬剤師。

7月5日、沼垂の叔母上とは、高橋イクのこと。

※「きい子日記」は原文のままで掲載。6月12日頃の日記と、死の床に横たわり腹臥位で認めたであろう、7月3日～7日迄の日記と比較すると、後者の文字の乱れは否めない。

八一「日記」抜抄

7月3日

雨模様なりしをキイ子をリヤカーに乗せ、リヤカー七往復にて観音堂へ引越す。

日暮れて間にあはず夕食を略す。障子に紙なき室多く、電灯は家中にて一個のみ。

キイ衰弱加はる。キイ子心得方につき申きかす。

7月4日

牛乳二合貰ふ。本郷へ大根キャベツの配給を受取りにゆく。

夕刻、八幡の娘大鯛一尾持ち来る。丹呉へ半分わかつ。

7月5日

田舎女から隠元、キャベツを買ふ。高橋イク来る。八幡来らず。牛乳一合貰ふ。

今日障子貼り半分出来る。

7月6日

隣の三浦から胡瓜を貰ひキイ子喜びて食ふ。

牛乳持ち来らず。

7月7日

キイ子胡瓜を食ふ。夜、丹呉家へ行き座敷にて家族の人々に美術の談をなす。

7月8日

早朝、キイ子遺言。下痢あり。イク沼垂へ帰る。

山井来る。白米二升、油二合、意苡仁きいじん、金百圓円など持ち来る。丹呉康平来る。

7月9日

キイ子卵一個、粥一杯のみ。牛乳をのまず。八幡来る。

7月10日

キイ子意苡仁きいじんと牛乳一合と卵半個。

未明にキイ子危篤に陥る。恰も空襲警報中。

午前、八幡の来診を乞ひ葡萄糖注射の後顔面一變し苦悶するにつき案臥せしめ余も暫時まどろみ居るところへ沼垂の人々来る。物音に目さまして病人を見れば仰臥のまますでにこときれてあり。午後四時頃なり。

7月11日

未明に床の中にてキイ子の戒名を素月妙影信女と命ず。後に素月冷光信女と改む。

柴橋の尼寺の若き尼を招きて九時讀経。

火葬に行く。同行は丹呉康平、市島昂かたはるの二人、車を牽き行くは隣の三浦

と向の佐官なり。

7月12日

八時骨拾いに行く、顔面の骨よく形を保ちてのこれり。九時半、尼来り讀経。

丹呉より観音堂を引き上げて自宅へ戻り来たらんことを勧めらる。

尼へ布施は五圓づつ二回。

7月19日

きい子を追悼の歌をつくる。

7月24日

二百二十八圓八十四錢（キイ子郵便貯金元金）、中條局にて右受取る。

8月10日

今朝にて「紀伊子」を書き上げ、…あらまし清書成る。

8月15日（終戦の日のコメントなし）

盆の酒さらに一合配給受く。二級酒なり。

8月27日

本日はきい子四十九日なり。

8月28日

瑞光寺に骨箱に五十圓を添えておいて来る。

※八一の使っている愛娘の名（ファースト・ネーム）について、不統一の点に疑問をもたれたかと思う。正式には、明治45（1912）年の出生時の名前は、高橋キイであり、次に會津キイとなる。昭和19（1944）年2月10付で、新潟市長に届け出た「養子縁組」戸籍抄本には、キイと記載されている。しかし本人自身が、きい子、紀伊子という表示を好んで私信などに使い、八一も、キイ子、きい子、紀伊子とそのときどきに使いわけている。結局、同一人物であるが、ファースト・ネームの表示が不統一になってみえるのである。挽歌「山鳩」は、最初の構想は、「紀伊子」であった。（8月10日付「八一日記」参照）

ちなみに、秋艸道人は會津八一の雅号で、主に書の揮毫に使った。また、渾齋こんさいも彼の齋号のひとつであり、秋艸と共にしばしば使われている。老子の『道徳経』の「渾トシテ其レ濁レルガ若シ」という一句からとった。著書に、『渾齋隨筆』（1978）がある。

※松井敬宛（7月4日付）の八一手紙には、「リヤカーにて六往復も、拙者とある老人と二人にてつとめ候」とある。

※7月4日、八幡は、八幡寛吉医師のこと。八幡医師の「証明書」が残されている。

「中条町大字西条 丹呉康平方 會津キイ 34才

病名 慢性気管支加答兒

右榮養補給上牛乳毎日二合摂取の必要有りと認む

右証明仕候也

昭和20年6月5日 医師 八幡寛吉 (會津八一記念館蔵)

※6月16日の「八一日記」には、「…キイ子咽頭結核と観念したるよし」とある。しかしながら、八幡主治医は、きい子が「結核ですか」と問うても、「わかりません」と答えたという。死後は肺結核と明記した。福田雅之助宛書簡(s.20.9.25付)に、八一は、「然るに最後の様子を見るに、四肢冷却し知覚を失ひ悪寒を覚え遂に心臓を『球の如きものが下から上へ押し上げるようにて苦し』と申して絶命したること故、拙者は心臓脚気の衝心と存じおり候」と書き送っている。

※7月10日、意苴仁よぐいにんは、ハトムギの種子で、漢方薬。利尿、鎮痛、緩下、消炎などに用いる。

會津八一書簡

きい子が疎開して、越後中条の豪農の館・丹呉家に入ったのは、昭和20(1945)年4月30日で、同家の持仏堂である観音堂で病没したのが、同年7月10日である。彼女が八一と観音堂で過ごした日にちは、たったの8日間であった。疎開時代の「きい子日記」は、同年6月14日から始まり、7月7日が絶筆となっている。20頁にわたって、24日に及ぶ、自らの病状の変化、生活環境、身辺諸事に関する所感、そして迫りくる“死”に対する考えについて、日誌形式ではあるが、簡明直裁に、要点をついた筆法で、纏められている。宿痾との壮絶な闘いでありながら、心は清澄であり、頭脳は明晰である。病床に伏しながらであろうが、それでも文字の乱れの少ない秀麗な鉛筆書きの文字で綴られている。

一方、八一が丹呉邸に入ったのは、同年5月2日で、観音堂を去って丹呉邸に切上げたのは、同年11月1日のことである。八一は、きい子死去から、観音堂での百日間の喪に服する生活に入った。観音堂生活日数は、121日で、彼女の逝去から起算すれば、113日を数える。

「八一日記」は、昭和20年に限って、8月30日の記録を最後に、9～12月末まで、全く掲載されていない。おそらく現物そのものが欠落したためであろう。したがって、観音堂生活における八一の心境について、詳述しようとするれば、八一の数多い私信の中から、発掘するほかに、正統的方法は残されていない。

百日余の観音堂生活のなかで、八一は人生をどのように考えたのであろうか。また、きい子亡きあとの自分の人生の行く末をどのように考えていたであろうか。このテーマに接近するには、やはり、八一の私信から、そ

の秘密を解く鍵を見つけるのが正攻法であろう。

八一が親族、知人、友人、弟子へそれぞれ書き送った私信からは、耳を澄ますと、八一の心の声が、二種類聞こえてくる。冒頭に掲げた故豊原治郎氏の論考の中で、「その一つは亡き娘に対する哀切極まりない追慕・慟哭の声となり、その二つは悲運の境涯に在ってなおも身を挺して耐え抜きながら行く末の身の処し方についての決意の声となっている」と看破している。

八一の人生最大の悲運の境涯の中から、再び立ち上がった晩年期の生きざまの原点を、観音堂生活のなかに見出し得ると考えているが、彼の素直な心境は、彼の私信の中に赤裸々に明示されている。(『會津八一全集』第九巻所収の私信と吉池進『會津八一傳』所載の八一私信とから参考資料をいくつか引用してみたい。)

7月23日(山本一郎宛 書簡。八一の親戚で松野尾村長。)

丹呉氏は皆々非常の人格者にていつも親切をつくしけれられ候へども呼吸器の病気を恐れられ當方としても憚るべきことなれば、同氏所有の観音堂と申す村はづれの堂牢に移り晝夜薪水と看護との事に当り、拙者も初めてつくづくと人生を味ひたる如くにて候。只今は遺骨とともに、その荒れ果てたる堂中に起臥致し候。⁽²⁾

7月25日(料治熊太宛。料治は、「秋艸堂諸事雜用引受け執事」と自称する昵懇の間柄。)

きい子永らく御相遇を受けしところ、去ル十日養生相叶はず死去致し候。生前の御好誼を謝し候。実は罹災後ことに衰弱したるに、人の好む病気にもあらねば、丹呉家の所有する観音堂といふ弧屋に引移り、拙者、薬取り、買物炊事より晝夜の看病まで、一人にてつとめ候ことにて候。ことに死前二日、床上に端坐して、遠近の知己に感謝の傳言を拙者に懇願いたし候。実に感慨に不堪候。罹災もこの度のことも、拙者にとりてはよき打撃たらしめたく静思致し居り候。⁽³⁾

8月8日(長島健宛 はがき。『長島たけし文集』p.333)

七月十日キイ子遂に病死し、その前後僕は自炊しつつあるも極めて元気なり。波瀾あり浮沈ありてこそ、人生は味ふべきなり。⁽⁴⁾

10月6日(福田雅之助宛 書簡。)

観音堂にては七月以来三ヶ月絶對一人にて相暮らし来り、幽獨なる生活の至味も悟得致し候。⁽⁵⁾

11月11日(増田徳兵衛宛 書簡。)

きい子の病死と観音堂の窮乏なる生活ありてこそ稍々すぐれたる歌

を作るほどの心境にも相済み候ことにて候。奈良などに行きて、到るところに歓迎せされ、歓待せられて、にこにこしてくつろぎ居る時は、心は緩みを生ずるものか、応待に疲労するのみにて、歌などは、一首も歌らしきものは出来るものにあらず候。拙者の如きは、苦勞の中から心を研ぎ出し行きたく存居り候。芭蕉などの行脚はやはりその気分みなぎり居る点がよろしきにて候。(6) (吉池進『會津八一傳』p. 584)

※(3)の圈点は八一自らが付したもの。一連の八一私信では、唯一の例外で、異例というべきである。それだけに、非常に重要な意味を包蔵していると考える。私見では、“よき打撃”という彼の受け止め方は、(6)の増田徳兵衛宛私信の中で、彼が言明している自分の信念と完全に符合するものである。傍点は引用者が付した。

歌集『山鳩』と歌集『観音堂』のうた

「山鳩」序 (前詞全文)

きい子もと高橋氏、二十歳にして予が家に來り養うて子となす。よく酸寒なる書生生活に堪へ、薪水のことに當ること十四年、内助の功多かりしは、その間予が門に出入せしものの齊しく睹るところなるべし。もとより蒲柳の質なりしを、幾度か予の重患に侍し、遂に疲勞を以て病因をなしたるが如し。今春臥して痾褥に在るに當り、一夜たちまち戦火を被り、わづかに身一つを以て免れ、予とともに越後に歸り、西條村の丹呉家に寄りしが、幾何もなくなして病勢大に進みしかば、予はその邸を辭し、伴ひて村端なる観音堂といふに移れり。こは丹呉の祖先某々が剃髪して餘生を送られしところにして、今なほ數奇の遺構を偲ぶべきあるも、その後、數代の荒廢を重ね、今は窓前草木深く鎖して鬱々たる四隣の綠陰には、ここかしこ蒼白き墓石さへ數ふべく、いとわびしきさまなれども閑靜にして人事に遠きをめづべしとて來りしなり。もとよりかかる世のさまとて頼むべき人手も無く、藥餌にも乏しきを、看護に炊事に、予みづから迂拙の力を瘁したるも、七月十日といふに、ここにして白晝遂に永き眠に入れり。きい子は平生學藝を尚び、非理と不潔とを好まず、絶命に臨みてなほ心境の明清を失はざりしに、時恰も交通のたよりあしく、知る人の來りて枕頭を訪ふもの殆ど無かりしかば、予ひとり側にありて、衷心の寂寞を想うて、しきりに流涕をとどめかねたり。やがて隣人に援けられて野外に送り、茶毘に附し、翌朝ひとり行きて骨を拾うて歸り來りしも、村寺の僧は軍役に徴せられて内に在らざるを以て、雛尼を近里より請じ來るに、その年ようやく十餘歳、わづかに經本をたどりて修證義の一章を読み得て去れ

り。
乃ちみづから戒名を撰み授けて、素月冷光信女といふ。予が家の墓所は新潟市西堀なる瑞光寺にあるも、市は今空襲を虞れて騒然たりといへば、他日の平静を待ち、携へ去りてその墳中に納めむことを期す。されど予すでに老いたるに、戦局の歸趨また知るべからず。今はただこれを記して、この一聯の序に充つるのみ。

昭和二十年八月十日

※「序」の段落は、『會津八一全集』(第4巻、pp.255-257)を参照。結城信一は、『山鳩』のころの中で、「この『山鳩』には、また、会心の作と自讃された長文の『序』がある」と述べている。

※句点、読点は、宮川寅雄『秋艸道人随聞』pp.126-28.参照。「序」の下線は引用者が付した。

山鳩

いと	のきて	けさをくると	かすかなる	そのひとことの	せむすべぞなき
山鳩の	とよもすやどの	しづもりに	なれはもゆくか	ねむるごとくに	
あひしれる	ひとなきさと	に	やみふして	いくひききけむ	山鳩のこゑ
やすらぎて	しばしいねよと	わがことの	とはのねむりと	なるべきものか	
いたづきを	ゆきてやはせと	ふるさとの	いなだのかぜを	とめこしものを	
やみほそる	ながてとりもち	まがつひに	もえたつやどを	いでしひおもほゆ	
ふみよむと	ただにこもれる	わがいほに	はべりてすぎし	ひとよかなしも	
うつしよの	ひかりともしみ	わかきひを	わがやどいかに	さびしかりけむ	
*ひとのよに	ひとなきごとく	たかぶれる	まづしきわれを	まもりこしかも	
*いくたびの	わがいたづきを	まもりこし	なれなかりせば	われあらめやも	
*いたづきの	われをまもると	かよわなる	ながうつせみを	つくしたるらし	
*わがために	ひとよのちから	つくしたる	ながたまのをに	なかざらめやも	
ひとみな	はばかりわれに	つつまざる	ながことの	はの	すがしかりしか
くみいでて	ひとにすすめし	ひとつきの	ちやにさへこめし	ながこころかも	
をのこごに	うまれたりせば	ひたすらに	ひとつのみに	すすみたりけむ	
あひしれる	わかびとつどひ	いつのひか	われをかこみて	なをことなさむ	
わがやどに	しじにとひこし	わかびとの	なすなからめや	ながたまもみよ	
山鳩は	きなきとよもす	ひねもすを	ききてねむれる	ひとあらなくに	
ひかりなき	とこよののべ	はてにして	なほかきくらむ	山鳩のこゑ	
ひとりゆく	よみぢのつかさ	こととはば	わがともがらと	のらましものを	
*かなしみて	いづればのきの	しげりには	たまたまあかき	せきりうのはな	

(中央公論社『會津八一全集』第4巻(昭和57年発刊)255~261頁より転載)

※8月10日付の「八一日記」には、「今朝にて『紀伊子』を書き上げ、…」とあるから、最初は「山鳩」ではなく、「紀伊子」がタイトルであったことがわかる。8月10日以降に「山鳩」4首を歌詠し、これらを補入して、改めてタイトルを「山鳩」にした、と推測される。本稿では、「やまはと」を漢字の「山鳩」と明記して、他と判別しやすいようにした。

観音堂

昭和二十年八月

くわんおんの だうのいたまに かみしきて うどんのかびを ひとりほしをり
 かたはらに ものかきをれば ほしなめし うどんのひかげ うつろひにけり
 かどがはの いしにおりゐて なべぞこの すみけづるひは くれむとするも
 *このごろの わがくりやべの つたなさを なれいづくにか みつつなげかむ
 のきしたに たちたるくさの たかだかと はなさきいでぬ ひとりすめれば
 にはあれて はえひろごれる やまぶきの えださししのぐ はぎのはなぶさ
 うゑおきて ひとはすぎにし あきはぎの はなぶさしろく さきいでにけり
 あきふかき みだうののきに すごもると かやにはねうつ はちのむれみゆ
 *ひそみきて たがうつかねぞ さよふけて ほとけもゆめに いりたまふころ
 *うらにはの しげきがもとの あらくさに こぼるるひかげ みつつかなしも
 みゆきふる ふゆをちかみか わがかどに ひにはこびこし そまびとのしば
 わがかどに いくひはこびて そまびとが つみたるしばに あきつたちたつ
 そまびとの つみたるしばに わがかどの さくらのしたば いろづきにけり
 ひとりすむ みどうのにはに つどいきて むらびとさわぐ しばかうらしも
 むらびとは おのもおのものに しばかひて つみたるのきの あたたかにみゆ
 そまびとの くるまいにたる くさむらに しばひろひきて かしぐけふかも

(中央公論社版『會津八一全集』第4巻(昭和57年発刊) 262~266頁より転載)

※上記に掲出した『観音堂』16首は、のち、『寒燈集』に収めるにあたって、最初の10首が「観音堂」とされ、あとの6首が「柴売」として編成された。

「観音堂」がはじめて発表されたのは、雑誌『藝苑』(巖松堂書店、1945.10)であり、収録歌数は11首であった。「前詞」があって、「罹災して満屋の図書器玩ことごとく烏有に帰したれば、しばらく疎開して故郷に在るに、伴い来たりし養女みまかりて今はわが身ひとつにて村端なる観音堂といふに自炊す」とある。11首のうち、

わがかどの くさにひききて むらびとが ほしたるしばに あきつたちたつ
 の一首は、のち、

わがかどに いくひはこびて そまびとが つみたるしばに あきつたちたつ
 と改作されて、やがて「柴売」に移して、収められた。

※『山鳩』と『観音堂』との2巻37首で、とりわけ側々として胸をうつ8首の作詠には、*印を入れた。

真実と虚構の間

〈きい子出生地についての疑問〉

きい子の父親・高橋喜蔵が届け出た「きい子戸籍抄本」には、「中蒲原郡沼垂町大字沼垂1188番戸に於いて出生」となっている。現在は、沼垂西1-7-20と沼垂西1-7-21番地に分割され、S邸とA邸が建っている。中央区役所の戸籍係・時田賀章氏によれば、明治31(1898)年7月16日に、番戸制度から番地制度に改定されたという。きい子が沼垂小学校に入学当時の自宅番地は、沼垂889番地である。現地調査では、“1188番戸”と“889番地”は、ぴたりと一致しない。一区画(ブロック)の対角線にある。高橋喜蔵は、米穀商として産をなした実業家であり名望家であったとはいえ、これほど広い土地を所有していたともこれまた思い難い。889番地には、現在、大きなG玩具店と別棟の蔵が建つ。

大正3年4月1日付の「新潟 沼垂合併 沼垂全圖」を繙くと、栗之木川などの水運を利用した物流ルートとして、米俵などの搬入・搬出の利便性は、“889番地”の方が断然有利のように思えてならない。100年前の当地の景色と現在のそれは、かなり違ったものであろうが、沼垂の歴史資料を詳細に再調査・検証してみる必要がある。

〈きい子は東京秋艸堂にいつ入ったか〉

宮川寅雄の「山鳩解題」によれば、きい子が秋艸堂に入ったのは昭和6(1931)年としてある。「山鳩」序文の冒頭の一文から起算すれば、そうならざるを得ない。八一の近隣に居を構えた料治熊太『會津八一の墨戯』では、彼の記憶によると昭和6年となっている。その他、結城信一『柘榴抄』では、昭和6年、近藤富枝『やまばとの声』では、昭和7年春、清水邦夫『わたしの夢は舞う—會津八一博士の恋』では、昭和7年5月18日となっている。ノンフィクション作家・工藤美代子『野の人 會津八一』では、昭和8年3月21日の八一の実弟に宛てた手紙を援用して、きい子が秋艸堂に現れたのは昭和8年であるとしている。

昭和9年3月27日夜に書かれた、きい子の手紙に、「其の日其の日を用におわれて暮らし、もう一年近い月日を送ります」(高橋戒三宛)とあるので、きい子が昭和8年3月末に秋艸堂に入ったことは、現在では、動かぬ証拠となっている。

〈「山鳩」の序文にみる詩と真実〉

太平洋戦争中の昭和18年、曾良の芭蕉隨行日記が発見されたとき、芭蕉

の研究家に大ショックを与えた。名作『おくのほそ道』で、芭蕉は文学作品とするために事実を曲げることが必要であった。たとえば芭蕉と曾良が日光に着いた日は雨が降っていた。日光は日の光と書くので、雨ではどうにもならないので、芭蕉は、〈あらたうと青葉若葉の日の光〉という句を作った。要するに文学とフィクションは大体同じものだと考えてよい。⁽⁷⁾

このように考えていくと、「山鳩」の序文に見られる、①二十歳にして予が家に来り、②村端なる観音堂、③白晝遂に永き眠に入れり、④雛尼を近里より請じ来るに、その年ようやく十餘歳、など①～④の文言は、事実からは微妙に乖離している。

きい子が東京の秋艸堂入りしたのは、20歳を超えていたし、越後の観音堂は村端ではなく、中条町の中心により近い。きい子の絶命は、午後4時頃である。また、その年10余歳とした雛尼は、当時24歳であった。要するに、文学的な価値をより高めるための、八一の〈詩的許容〉(poetic license)は、文学作品としては、当然許されることなのである。

〈きい子の墓所についての考察〉

(會津八一記念館蔵の「會津八一書簡」(昭和20年9月12日)に、きい子の墓所について、八一は、実姉のキミに下記のように手紙を送って細かく指示している。同寺にて、葬儀を執り行ったのは、きい子の没後2か月後の9月10日であるから、その二日後のことである。)

高橋きみ様 (新潟市上木戸 高橋戒三方)

先日は御苦勞さまでした。遺骨を墓穴に納めるについて只今瑞光寺へも行って 住職によく打合わせに来ましたが なるべく朝早く(八時頃までに)来てくれれば 住職自身が立合って儘力すると言って居りました。遅くなると御経をよむため檀家めぐりをするわけです。

それから墓は會津友次郎家のものと會津政次郎家のものと 私の家のものとは別です

私の方は「會津屋祐治」とあるのがそれです。

図でよく承知してゐて下さい。(八一直筆の〈図〉は、紙面の都合で省略)

本来 八一の墓ありし所へ政次郎の墓を建て八一の方を傍へ移したるものなれば墓口の下に骨瓶が正しく納めて無いかもしれず
然る時は今回新たに墓を掘って キイ子の骨を御納めるを乞ふ。

※「低く小さき會津八一の家の墓」の壙中に、きい子は永眠していると推定されるが、會津きい子の名前を刻み記した墓標はない。

※八一の手紙には、會津屋祐治と誤記してあるが、正しくは會津屋祐吉である。

おわりに (秋艸道人の悟り)

「永遠が時間の真只中に切り込んだとき、悟りは得られる。それは結局時間が永遠の中に融けこむといふのと同じことになる」と、鈴木大拙はまず「悟り」とのかかわりにおいて永遠と時間のことを、このように説明している。作家中野孝次は、「だから『永遠の今』(eternal now)というのは、本来まったく異質なものの結合で、ありえぬことだが、そのありえぬことを人間の一念がなしとげるとき『悟り』が得られる。…永遠が今に切りこむ、今が永遠の中に突入して、永遠が今となり、今が永遠となる絶対的現実 (absolute present) においておこる靈的革命が、悟りである」⁽⁸⁾と解説している。

八一の観音堂時代の生活から、養女きい子を追慕する、悲風惻々として、あくまでも格調高い名歌集2巻、『山鳩』21首、『観音堂』16首となって世に問われた。これらの悲傷の曲は、寂しくて苦しい八一の心の在りのままの姿であり、純粋な涙の結晶であり、哀惜の昇華であり、自然そのものの情感の奔流であった。そもそも歌の原始は、感情の高揚を言葉に託したもので、自然の音楽を伴っていた。朗々たる音調は人の心を陶醉させる。八一が、これらを舌頭(せんてん)に千嚙して、作詠した挽歌は、不朽の文学に結晶されて、永遠に色あせることはないであろう。純粋で自然であるがゆえに読む人々の心を打つのである。

歌人・折口信夫(釈道空)をして、

殊に戦災(せんせん)を蒙って後、越後西條の僑居に居て詠んだ山鳩以下松濤、幽暗に到る六十首は、人生、聲をあげて哭く悲しみの、堪へ易きを思はずには居られない。この境地に會津さんを据ゑて、その傍觀を強ひる文學のむごさを思はずに居られない。

と深い感慨の淵に立たしめた所以でもある。

あとひとつは、観音堂に籠ること百数十日、八一は過酷な災厄にさいなまれつつ苦闘し、「苦勞の中から心を研ぎ出し」て、いつしか、“悟り”を開いたのであろう、と筆者は確信している。彼は『観音経』や禪林句にも詳しく、手許のコロタイプ版『観音堂』(北島書店)を開くと、「念彼観音力釋然解脫」と冒頭に掲げてある。書帖『観音堂』に、仏語から「能救世間苦」「梵音海潮音」「釋然解脫」「施無畏」などの成句を挿入したのは、単に観音堂にゆかりがあるとするだけではなく、観音堂にて若き生を終えた、きい子に対する供養の表現でもあるだろう。それと同時に八一自身が、「苦勞の中から心を研ぎ出し」、悟りに至る道程にあったであろう、と筆者は確信的に推測するものである。

また、福田雅之助宛書簡に、「観音堂にては七月以来三ヶ月絶対一人にて相暮らし来たり、幽獨なる生活の至味も悟得致し候」と記述していることから明らかであろう。だからこそ秋艸道人・會津八一は、悟得した心境の中で、困厄を極めた境涯から、フェニックス（不死鳥）のように、学芸文人（歌人・書人）として見事に立ち直ったのである。

〈付記1〉

観音堂顛末記

観音堂は、丹呉本家の持仏堂であり、約200年前に、大総寺と丹呉本家との中間に、約850坪の広い敷地の中央の少し奥手にある本堂と庫裏くらとから成る2棟の建物の一般的な総称である。正確には、観音堂は百体観音を安置した本堂を意味する。庫裏は別名〈普門庵〉と称した。戦前は、庫裏には堂守が居住していた。しかし、戦時中には、都会からの疎開者家族が住んでいたが、この家族を別の家屋に移し、八一ときい子を急遽入居させた。きい子病状悪化のためである。父娘の居住部屋は、本堂に一番近い一渡り廊下で本堂につづいていた一6畳の間であった。その他の事情もあったが、肺結核、咽頭結核、衝心脚気などの釣瓶打ちとなって襲い来る病魔に、きい子が立ち向かうためには、東向きの風通しの良い部屋が好まれた。真夏の暑苦しいこの狭い部屋で、父娘が暮らしたのは、たった8日間にすぎない。7月10日午後4時頃、きい子が死去したからである。

観音堂は、昭和27～28年にかけて、老朽化が甚だしいため、解体・取り壊された。観音堂本堂一建物と百体観音一は太総寺に移し（28.5.10）、原型のまま、復原させ、現存している。歌集「観音堂」でもっとも有名な一首、〈ひそみきて たがうつかねぞ〉の“鉦”も大事に保存されている。昭和22年9月中旬、裏の大きな樅の木に落雷があって観音堂の一部が焼けた、と吉池進『會津八一傳』にあるが、丹呉静さんはこれを否定している。また、24年12月7日深夜に失火、丹呉家の母屋、土蔵など、330坪、家財などを焼失した。

「會津八一の在世中、荒廃した観音堂の処置に窮している丹呉家の事情をきいて、八一は、ふとこの堂を買取することを思いついた」と宮川寅雄は「観音堂解題」に書いている。八一の提案額は、5000円であった。あまりにも低廉すぎて、丹呉本家もさぞ驚いたことであろう。（「八一書簡」s.26.3.16付、参照）

かくて不滅の文学に結晶せしめた時期の遺跡である観音堂は地上から消え去り、會津八一の歌にのみが、その面影を残すことになった。

〈付記2〉

『山鳩』をうたう 一會津きい子生誕百年に寄せて一

「會津きい子生誕百年の企画」に関しては、會津八一記念館の企画「絶唱『山鳩』のモデル きい子 その愛 會津八一と親族」、新潟市立図書館の企画「會津八一を支えた 高橋きい子の生涯と沼垂」の担当者の学芸員・図書館員に深甚の感謝を申しあげたい。「山鳩の会」会員の他に、多くの人々の協力を得た。すべての方々の名前を挙げる紙面の余裕がないが、心からお礼を申しあげる。わけてもお二人の名前を下記に明記しておかなければならない。

豊原 晴子さん

『會津紀伊子抄』をはじめ、10冊以上の會津八一関係書の著書を次々と上梓され、八一研究の分野に多大な貢献をされた、故豊原治郎氏・令夫人晴子さんご令息・治彦氏（京都大学院・准教授）が7月7日に、空路で新潟まで駆けつけて、『山鳩』をうたう会に参加してくださったことに感謝。

晴子さんからは、上記の新潟市立中央図書館「特別コレクション室」の展示に、治郎氏の研究資料の中から、計16点の貴重な第一等史料を提供していただいた。また、新潟高等女学校「第29回卒業記念」アルバムも提供いただき、きい子が通学した高女の「第一校舎全面」の写真を展示することができた。

翌8日には、豊原親子は中条を訪ね、曹洞宗長寿山太総寺で観音堂から移設された百体観音を拝み、〈ひそみきて たがうつかねぞ さよふけて〉の“鉦”を林啓昭住職（s.14生）のご指導で打たせていただいた。平成6年10月7日、NHKテレビ番組「歌人會津八一」番組の〈語り歩き〉に出演された、在りし日の治郎氏の雄姿も髣髴として思いだされ、晴子さんには忘れられないセンチメンタル・ジャーニー（感傷旅行）となったであろう。この想い出ふかい八一歌碑の前で、親子の記念写真を撮った。

うつせみの 汝がおもかげの 象徴を 清楚なる歌碑に みとめたりわれは （治郎）

そのあと丹呉庸平氏宅を訪れた。八一が疎開した当時の丹呉邸は、約3000坪もある豪農の館で、築山には〈聴泉亭〉と称された珍座敷があり、八一はここで読書に耽り、李白の漢詩に親しみ、「柿若葉」の歌想を練った。丹呉庭上松樹の下この場所に、歌碑〈故郷の 木間すずしも 古の 大さ聖の 唐歌のごと〉が建つ。

昭和20年4月30日夕刻に、きい子を玄関で迎え入れた丹呉静さんは、大正6年生まれ95歳のご高齢ながら、ご健在でかつ頭脳明晰、きい子さんの思い出話をかみしめるように語ってくれた。静さんの夫君の故協平氏が、早稲田高等学院入学の際、保証人を依頼すると、八一は、やおら一本の白墨をとり、その先端に〈八一〉と篆刻して、べたんと押印してくれた、という逸話を、のちに庸平氏から伺った。

また、柴橋庵主の渡邊貞乗尼にもお会いできた。同年7月11日と12日に、八一に乞われて、観音堂を訪ね、きい子遺骸の枕頭で修証義を読んだ、八一の「山鳩」序文に“雛

尼”と呼ばれた尼僧である。貞乗尼は大正12年生まれで、91歳。観音堂できい子の枕経を読む傍らに座す八一の表情まで再現してくれた。

中条訪問に際して、胎内市會津八一記念事業実行委員の高橋与兵衛、今村克治、中野隆一諸氏のお世話になった。三名の周到なプランとご案内で、まことに有意義で、心に残る旅となったことに感謝。

むろふし こうえん
室伏 香縁さん

今年7月7日の新潟公演で、「5歳で長唄、三絃の世界に入り、10歳で詩歌朗詠に入門。NHK邦楽オーディション合格。クラウンレコード専属として若い頃から活躍。1983年から漢詩を中国語で味わう運動を提唱し、日中文化交流に新しい分野を拓いたと高い評価を受けている。短歌を通して「日本人の美しい心」をフランス、イタリア、アメリカ、中国など海外に紹介すると同時に、短歌、漢詩を「歌」として現代に復活させることに情熱を傾けている。15年程前から會津八一記念館との交流を始める。アメリカ、中国、奈良、新潟市、中条町などで「山鳩」の歌や會津八一の歌を朗詠している。現在、21世紀詩歌朗詠懇談会会長として活躍されている」と紹介された、室伏香縁さんを招聘して、オーケストラと琴の弾き語りで、「山鳩」を数首歌っていただいたことは、「山鳩の会」としても、光栄な出来事であった。

香縁玲瓏とでも表現すればいいかどうか知らないが、天性の美声に加え、長年鍛えぬかれた声量は、聞く人々を魅了した。〈わたしの身体全体が楽器です〉という音吐朗々たる吟詠は、恰もステージから七夕の天空にむかって昇華するように響きわたった。天にあるきい子も、「山鳩」の声に宿る祈りの物語に耳を傾け、これを喜ばれたのではなかろうか。

〈付記3〉

—會津きい子 生誕百年に寄せて— 會津八一の〈短歌〉をうたう

作曲・朗詠 香雲流宗家 室伏香縁

雲際	昭和二十年四月
みやこべを のがれきたれば	ねもごろに しほうちよする ふるさとのほま
おりたてば なつなほあさき	しほかぜの すそふきかへす ふるさとのほま
「山鳩」のうた	昭和二十年八月
やまばとの とよすやどの	しづもりに なれはもゆくか ねむるごとくに
うつしよの ひかりともしみ	わかきひを わがやどいかに さびしかりけむ
いくたびの わがいたづきを	まもりこし なれなかりせば われあらめやも
わがために ひとよのちから	つくしたる ながたまのをに なかざらめやも
かなしみて いづればのきの	しげりには たまたまあかき せきりうのはな
道元・良寛のうた	
春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて	すずしかりけり 道元禪師

形見とて 何残すらむ 春は花 夏ほととぎす 秋は紅葉ば 良寛

良寛漢詩 一東郷豊治編著『良寛詩集』より

雨晴雲晴氣復晴	雨晴れ 雲晴れ 氣また晴る
心清遍界物皆清	心清く 遍界 物みな清し
棄世棄身為閑人	世を棄て 身を棄て 閑人となり
初月与花送余生	初めて 月と花とに余生を送る

啄木の短歌をうたう (アンコール吟詠として、三首をうたう。)

たはむれに 母を背負ひて そのあまり 軽きに泣きて 三歩あゆまず
かにかくに 渋民村は 恋しかり おもひでの山 おもひでの川
ふるさとの 山に向ひて 言うことなし ふるさとの山は ありがたきかな

日時：平成二十四年七月七日 午後1時半～3時半

場所：新潟市立図書館（ほんぽ一と）「多目的ホール」

會津きい子生誕100年記念行事に関する覚書

1. 「会津きい子生誕100年に寄せて：八一に尽くした若い命」北嶋藤郷（『新潟日報』2012年3月31日）
2. 「會津八一を支えた 高橋きい子の生涯と沼垂」会期5月3日～7月31日（新潟市立中央図書館「特別コレクション室」、喜嶋奈津代・森直美作成の「會津八一・きい子の略年譜」も展示）
3. 「八一の養女 高橋きい子 短い生涯 手紙で紹介 望郷の念や闘病生活」（『新潟日報』記事 2012.5.1）
4. 講演会「『山鳩』をうたう —會津きい子生誕百年に寄せて—」7月7日 講師 北嶋藤郷（山鳩の会）詩歌朗詠 室伏香縁（香雲流詩歌朗詠宗家）（ほんぽ一と 多目的ホール）
5. 「絶唱『山鳩』のモデル きい子 その愛」会期6月29日～9月18日（會津八一記念館）
6. 「講演会とまち歩き 會津八一を支えた高橋きい子と沼垂」（「市報にいがた」平成24年6月17日）
7. 「会津八一『山鳩』のモデル きい子 生誕100年で病床日記初公開 苦しみ、揺れる心切々と」（『新潟日報』記事 2012年6月27日）
8. 「會津八一記念館 きい子との家族愛 日記など65点を展示」（「市報にいがた」平成24年6月24日）
9. 「会津きい子生誕100年 八一を支えて〈上〉苦悩と覚悟 すれ違う心情手記に吐露 信念曲げぬ姿に敬愛抱く」喜嶋奈津代（『新潟日報』2012年7月10日）
10. 「1945年6月14日～7月14日までのきい子・八一の日記」喜嶋奈津代（「山鳩の会」

きい子生誕100年の特別卓話（2012年7月10日 新潟グランドホテル）

11. 「会津きい子生誕100年 ハーを支えて〈下〉挽歌『山鳩』 魂を刺す激しい慟哭 万葉集に倣い死をうたう」和泉久子（『新潟日報』2012年7月11日）
12. 「生誕100年 人柄しのぶ 会津八一養女きい子 親族ら20人が法要」（『山鳩の会』：『新潟日報』記事 2012年7月11日）
13. 文芸講演会「会津きい子生誕100年に寄せて 疎開時代のハーときい子」7月13日 講師 北嶋藤郷（クロスバルにいがた 4 映像ホール）
14. 「平成24年度 夏企画展 絶唱『山鳩』のモデル・きい子その愛～会津八一と親族」喜嶋奈津代（『秋艸会報』（第34号 2012年8月1日）
15. 「会津きい子生誕百年に寄せて 『山鳩の会』の歩み」北嶋藤郷（『秋艸会報』（第34号 2012年8月1日）
16. 「生誕100年 会津きい子 不明の墓所を考察 手紙頼りに埋葬場所探索 ハーの養子先と推定 新潟・瑞光寺」喜多 上（『新潟日報』2012年8月15日）

会津きい子を直接知る人々

会津八一の養女きい子（旧姓高橋キイ）は、明治45（1912）年3月31日、新潟市沼垂西片原町に生まれた。本年が生誕100年目であり、没後67年が経つ。きい子を直接に知る人は少なくなった。いままでに筆者が直話で、きい子のことを取材できた方々は、渡部キヨ（きい子の姉）、高橋芳夫（甥）、鈴木静子（姪）栗田政子（姪）、坂井子イ（旧姓河田）、丹呉静の諸氏と、きい子の落命の翌日、枕経を読んだ渡邊貞乗尼である。中条・柴橋庵の「山鳩の会」に出席されて、貴重な直話をいただいた、渡部キヨさん、高橋芳夫さん、鈴木静子さんは、すでに鬼籍に入られた。昭和16年から秋艸堂に入り、約一年半、きい子を支えた坂井子イさんも、85歳を過ぎて下田から新潟市の「山鳩の会」に参加できなくなった。姪の故鈴木静子さんは、東京の女子大時代には、ほぼ日曜ごとに秋艸堂を訪ね、八一の薫陶を受け、きい子を助けた。新潟の「山鳩の会」の中心的存在で、この会の牽引役をしてくださった静子さんの逝去は、まことに惜しまれる。会津八一記念館会報『秋艸』（第5号）の鈴木静子「どうだんの露」や坂井子イ「おやさしかった先生」などは、貴重な資料となっている。

本年5月13日、会津八一記念館主査学芸員・喜嶋奈津代氏等とともに、きい子の甥御である故高橋芳夫邸を訪問した。当主の高橋春雄氏の破格のご篤情で、「きい子日記」、八一書簡などを手に取って、つぶさに拝見できた。これらの一等史料は、会津八一記念館の企画展「絶唱『山鳩』のモデル きい子その愛」（6月29日～9月18日）に、数多い展示品となって、入館者に感銘を与えた。また高橋春雄氏提供の地図・資料を片手に、10月10日、きい子生誕の地の西片原町の現地を踏んで調査ができたことに感謝している。



① 「山鳩」を熱詠する室伏香縁さん



② 柴橋庵の仏壇（きい子の遺影）



③ 太総寺の歌碑の傍らに立つ豊原親子



④ 丹呉静さんと豊原晴子さん

（2012年7月7日～8日撮影）

<引用文献>

- (1) 豊原治郎『観音堂時代の會津八一』『半どん』第128号（1995.8.5）p.45
- (2) 『會津八一全集』第9巻、（中央公論社、1983）p.457
- (3) 同上、p.462
- (4) 長島健『長島たけし文集』p.333
- (5) 『會津八一全集』全9巻、p.490
- (6) 吉池進『會津八一傳』p.584
- (7) 『ドナルド・キーン著作集』第一巻「日本の文学」（新潮社、2011）p.345
- (8) 中野孝次『死を考える』（青春出版社、2002）p.176

<主要参考文献>

『會津八一全集』第4巻、第9巻、第12巻（中央公論社、1983）
 豊原治郎『會津紀伊子抄』（中央公論社、1988）
 豊原治郎『学問の向こうに』（出版社不詳、2010）
 吉池進『會津八一傳』（会津八一先生伝刊行会、1963）
 料治熊太『會津八一の墨戯』（アポロン社、1969）
 工藤美代子『野の人 會津八一』（新潮社、2000）
 近藤富枝『相聞』（中公文庫、1985）
 結城信一『柘榴抄』（新潮社、1981）
 清水邦夫『清水邦夫全仕事1992～2000』（河出書房新社、2000）
 中野孝次『死を考える』（青春出版社、2002）
 宮川寅雄『秋艸道人随聞』（中公文庫、1982）
 宮川寅雄『山鳩』影印本 別添冊「山鳩解題」（中央公論美術出版、1971）
 宮川寅雄『観音堂』影印本 別添冊「観音堂解題」（中央公論美術出版、1970）

PISA型道徳授業の構想

中 野 啓 明

はじめに

筆者は、『敬和学園大学研究紀要』第21号の拙論「キー・コンピテンシーとPISAリテラシー」⁽¹⁾において、次のように述べた。

「PISAリテラシーとキー・コンピテンシーとの間に『裂け目』が生じないようするためには、リテラシーとキー・コンピテンシーの関係を意識した授業を構想することによって、PISA調査準備のために矮小化された授業とならないように配慮する必要がある。

中央教育審議会答申においてPISAとキー・コンピテンシーの位置づけが曖昧であること、PISAリテラシーはキー・コンピテンシーの一部であり、相互に関連しあいながら育成すべきものであるが、場合によっては『裂け目』が生じてしまう場合があることを述べてきた。今後は、PISAリテラシーとキー・コンピテンシーとの関連を視野にいった道徳授業の開発、『能力』に関する用語族について検討する必要がある。」⁽²⁾

そのさい、PISA（Programme for International Student Assessment）リテラシーとキー・コンピテンシー（key competencies）との関連を意識した試行的な道徳授業の実践研究としては、「手品師」を資料として、長岡市立大積小学校第6学年児童に対して山畑浩志教諭によって行われた授業、第5学年児童に対して山崎鋼教諭によって行われた授業があることを記した。

幸いにも、この試行的な授業の成果をもとに、平成24年度から山畑教諭、山崎教諭がともに所属する中越道徳教育研究会（岡村秀康会長）とともに共同研究を実施する体制が整った。

本稿では、この共同研究の取り組みの一貫として、「PISA型」の道徳授業を構築していく上での理論的な前提と、現時点での読解リテラシーを育成するための道徳授業の基本パターンとして考えられる「意見文」を用いた授業の枠組みとその課題を述べる。